

台湾台北ニ於ケル梅毒蔓延状況ニ就テ : Über die Vevbreitung der Syphilis in Taihoku

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38170

十全會雜誌

第十九卷第七號(第百二號)

大正三年七月一日發行

原著及實驗

●臺灣臺北ニ於ケル梅毒蔓延狀況ニ就テ

Über die Verbreitung der Syphilis in Taihoku.

臺北醫院皮膚科 池 上 豊

時勢ノ進歩ニ隨ヒ花柳病ノ蔓延ハ益々其ノ度ヲ高メ特ニ梅毒ニ至リテハ社會ニ害毒ヲ流シ健康ヲ尙總テノ病源ト死因トヲナス事多大タリ吾ガ殖民地タル臺灣ニテハ果シテ如何ナランカ今臺北醫院ニ通ジタル患者ノ統計ニ就キ報セントス然レ此ノ統計タルヤ絕對的ノ蔓延狀況トイフナ得ザルモ實際ノ蔓延狀況ヲ豫想シ得ル一方法ト信シ上記ノ題ノ下ニ報告セントス。

一、一般患者及ビ花柳病患者ト梅毒患者トノ比較

大正貳年度臺北醫院總患者數	四〇、二九一
花柳病患者數	一、〇二九
梅毒患者數	二、〇二九
總患者ニ對スル%	二對スル%
花柳病患者ニ對スル%	五、五、八七
梅毒患者ニ對スル%	一、四〇

癩疾	四三八	一、〇九	四三、五四
軟性下疳	二四三	〇、六〇	二三、六一

備考 一、總患者ニ對スル% 一、四〇ハ前年度(第七表參照)ニ比シ少ナキ

ハ上表ノ梅毒患者ハ皮膚科ニ通セシモノ、ミナ以テシ他科ニ來タリシモノヲ除外シタル爲メナリ

一、梅毒癩疾軟性下疳ノ患者計ハ花柳病患者數ヨリ多キハ一人ノ患者ニテ二種又ハ三種ヲ合併スルモノヲ別々ニ算セシ爲メナリ

一般ニ梅毒患者ハ癩疾及ビ軟性下疳ノ患者ヨリモ遙方ニ多クシテ花柳病患者中其ノ半數以上即チ五五、八%ヲ占ム

二、人種及ビ男女別

性	人種	內地人	臺灣人	外國人	生蕃人	計	梅毒患者ニ對スル兩性ノ%
---	----	-----	-----	-----	-----	---	--------------

男患者 二六九 二六 二 三六 六九、二

女患者 一四三 三五 一 一七 三、八

計 四一二 六一 三 五三 一五七

梅毒患者ニ對スル各人種ノ% 七、四 二六、〇 〇、三 四四 〇、一

人種ニ於テハ內地人ハ七割強ヲ占メ臺灣人ハ三割弱ヲ有ス、性ニ於テハ內地人臺灣人共ニ男子ニ多クシテ特ニ臺灣人ニ著シク一般ニ男子ハ其ノ七割弱ヲ占メ女子ハ三割ヲ有ス

三、年齡別

(原著及實驗)

第十九卷 第七號 一八七

第百二號

一

官廳雇員	二五	一六	一	一	四一
巡查	二一	一	一	一	二二
軍人	一一	一	一	一	一一
教師	一	三	一	一	三
學生	一	二	一	一	三
醫師	一	一	一	一	一
會社員	二四	一	一	一	二五
店員	一一	一	一	一	一二
船員	二	一	一	一	二
商業	六三	五八	二	一	一二三
工業	四	一	一	一	四
農業	一	二四	一	一	二四
勞働者	一五	一八	一	一	三三
職工	五二	一六	一	一	六八
請負業	一二	一	一	一	一二
公娼	七〇	一	一	一	七〇
藝妓	一五	七	一	一	二二
女中	四	一	一	一	四
無職	一四	九	一	一	二三
不明	五	四	一	一	九

内地人ニテハ下級ノ勞働者ヨリモ寧ロ官吏ニ多クシテ尙官廳ニ關係アルモノニ合ストキハ微毒患者總數ノ四分ノ一強ヲ占ム是レ大ニ顧慮スベキ現

象ナレモ臺灣ニアル内地人ハ官廳ニ關係アル人比較的多數ナルト且ツ是等ノ教育アル人ハ自己ノ健康ヲ顧ミル事甚シク微毒ノ如何ニ怖ルベキ疾病ナルヲ解スルガ爲メニ微毒ニ罹リシ恥辱ヨリモ一層其ノ健康保全ヲ慮ル結果ニテ大ニ欣バシキ事ナリ、公娼職工等ニ多キハ免レザル事實ナリ

六、過去拾年間ノ患者數

年次	内地人	臺灣人	合計
明治三十七年	二〇四	四三	二四七
明治三十八年	二二五	九九	三二四
明治三十九年	二七〇	七八	三四八
明治四十年	二一九	一四一	三五〇
明治四十一年	三二九	一九七	五二六
明治四十二年	三二三	一三八	四六一
明治四十三年	三二〇	一四七	四六七
明治四十四年	四四〇	一三一	五七五
明治四十五年	三九五	二二三	六一八

大正元年 臺北醫院通院全微毒患者數ハ未調査

大正貳年 内地人臺灣人共ニ年々微毒患者ハ増加シツ、アリ特ニ明治四十一年以後ヨリ頓ニ増加ノ傾向ヲ示セリ。

七、過去七年間ニ於ケル人口並ニ一般患者ト

微毒患者トノ比較

年次	臺北市人口	臺北醫院通院全患者數	微毒患者數	人口ニ對スル微毒患者ノ%	全患者ニ對スル微毒患者ノ%
明治三十九年	八、三三六	一、五三四	三、八一	〇、三三	二、一三

年次	臺北市 住民	臺北醫院 通院全患 者數	梅毒 患者數	住民ニ對 スル梅毒 患者ノ%	通院患 者ニ對 スル%
明治四十年	三,九三二	一六,二三三	三五〇	〇,四二	二,一七
明治四十一年	八七,八三五	二〇,八六六	五九	〇,五九	二,六一
明治四十二年	八九,六〇〇	一九,三五九	四六一	〇,五二	二,四四
明治四十三年	九二,〇〇九	一九,二四四	四六七	〇,五	二,三六
明治四十四年	九五,〇七五	二二,七四九	五七五	〇,六〇	二,六四
明治四十五年	九九,二〇八	二六,七四四	六二八	〇,六二	二,五五

臺北市人口ハ毎年増加シツ、アルト全時ニ一般患者モ梅毒患者モ共ニ増加シ近年ニ著シキ傾向ヲ有ス

八、内地人ト臺灣人ノ比較

年次	臺北市 住民	臺北醫院 通院全患 者數	梅毒 患者數	住民ニ對 スル梅毒 患者ノ%	通院患 者ニ對 スル%
明治四十一年	三,〇八一	一五,七五二	三三	一,五	二,〇九
明治四十二年	三,四二一	一五,四八六	三三	一,四四	二,〇九
明治四十三年	三,六六二	一五,七〇三	三〇	一,四	二,〇四
明治四十四年	三,四九二	一八,〇〇四	四四	一,七四	二,四六
明治四十五年	三,七〇九	二二,五九一	三五五	一,四四	一,八四
大正元年	三,六六二	四,四四四	一七	〇,三二	四,四四
明治四十一年	三,五七七	四,四四四	一七	〇,三二	三,五三
明治四十二年	三,五七七	三,九二二	一七	〇,三二	三,五三
明治四十三年	三,五七七	三,五〇三	一七	〇,三二	四,一九
明治四十四年	三,五七七	三,七〇〇	一三	〇,一七	三,五三
明治四十五年	三,五七七	四,八三四	三三	〇,三	四,六一

内地人ニテハ其ノ住民ノ約三分ノ二ハ通院治療ヲ乞フモノニシテ此ノ事ヲ

以テ見ルモ臺灣ニ於ケル内地人ハ如何ニ其ノ健康ヲ顧慮スルカチ推スルニ足ル從フテ梅毒患者ハ住民ニ對スル%モ全患者ニ對スルモノモ其ノ差異ハ至ツテ少ナシ、之レニ反シ臺灣人ニテハ住民ノ約二十分ノ一ガ通院治療ヲ乞フモノニシテ一般ニ臺灣人ハ疾病ニ對スル觀念少ナク從フテ疾病ニ犯サルトモ其ノ初期ニ診ヲ乞フ如キ事殆ドナク症狀ノ増悪シテ始メテ治ヲ受クルヲ例トスルガ爲メニ梅毒患者ニテモ住民ニ對スル%ハ甚ダ少數ナルニ反シ總患者數ニ比シテハ多數ナリトス故ニ内地人ニテハ現ハレシ梅毒患者數ハ臺灣人ヨリ遙カニ多ナリトハイヘ之レナ一般患者ニ比シ見ルトキハ全ク反對ノ現象ヲ呈ス

總括

臺北ニ於テハ梅毒患者ハ其ノ住民ニ逆比シテ内地人ニ多ク臺灣人ニ少ナキハ是レ後者ニテハ一般ニ無教育且ツ無智識ナルガ爲メ梅毒ノ怖ルベキ疾患タルヲ知ラズ微毒性ノ潰瘍又ハ發疹ノ如キモ單純ナル創又ハ發疹ト信ジ放置シテ意ニセザルカ又ハ一歩進ンテ賣藥療法ヲトルヲ例トシ症狀ノ強ク現ハレ苦痛ノ甚シキヲ感ツタル後ニアラザレバ殆ド醫治ヲ受クル如キ事ナク余ノ經驗ニヨレバ内地人ニテハ陰莖ノ無痛性ノ硬結又ハ無痛性ノ橫痃ノ如キモ決シテ不注意ニ過視スル事ナク診ヲ乞フトイフモ臺灣人ニアリテハカバル事殆ドナク尙第貳期梅毒ニテモ自覺症ヲ欠クガ爲メ何等ニ苦痛ヲ感セズ明瞭ニ擴ガル梅毒ニテモ更ニ意ニセズ只潰瘍性ノモノニ診ヲ受クルモノノ多數タリ即チ扁平「コンダローム」ノ如キ咽頭口腔ノ微毒性ノ潰瘍ノ如キ是レナリ第參期梅毒ニアリテモ内地人ニテハ此期ニ達スル前ニ既ニ治療ヲ受クルガ故ニ此種ノモノハ甚ダ少數ナルニ反シ臺灣人ニテハ本期ノ梅毒多數

ニシテ特ニ護膜腫ノ破懷シタルモノ多數ヲ占メ申ニハ猛烈ナル狀態ヲ呈シ
 慘膽タルヲ視ル事少ナシトハセズ又内地人ニテハ何等症狀ヲ呈セザル潜伏
 微毒ハ意外ニ多シ是レ全ク其ノ健康ヲ損害セザルニ務ムル結果ニテ患者自
 ラ何等ノ自覺症モ又他覺症モ有セザルニ關セズ微毒ノ既住症ヲ有スル爲メ
 ヲツセルマン氏反應ヲ乞フテ治療ヲ受ケント訴フルモノ少ナカラズ然レモ
 臺灣人ニテハ決シテカ、ル例ナク少數ノ潜伏微毒患者ノ如キモ他科ヨリシ
 テヲツセルマン氏反應ヲ托サレ其ノ結果トシテ現ハレシモノ多數ナリ尙臺
 灣人ニテハ微毒患者數ニ比シテ遺傳微毒多キ如キハ醫療ヲ乞ハザル數多ノ
 患者アルヲ証スルニ足ルモノトス

然ル如ク内地人ハ其ノ住民ノ割合ニ微毒患者ノ多數ナリト雖モ是レ全ク臺
 灣ニ於ケル内地人ノ健康ヲ慮ルト全時ニ微毒ノ如何ニ有害ニシテ怖ルベキ
 疾病ナルヲ自覺シ居ルガ爲メ醫診ヲ受クル事多ク且ツ其ノ症狀ハ一般ニ甚
 ク輕キニ反シ臺灣人ニテハ現ハレタル患者數ハ例令少數トハイヘ醫治ヲ乞
 フ事ナクシテ放置サレルモノ多數ニ且ツ醫療ヲ乞フ多數ノモノハ症狀ノ強
 キモノナリ故ニ吾人ハアル機會ニ於テ臺灣人ノ健康診斷ヲナストキニハ驚
 クベキ多數ノ微毒患者ヲ發見シ得ルヲ斷言シテ憚ラザルナリ尙病床日誌ノ
 記載ニ基キ臺灣人ニテ通院セシ微毒患者ノ症狀ヲ記サンニ其ノ如何ニ強烈
 ナルカヲ推スルニ足ラン、即チ

第壹期微毒 三十九名

混合下疳一七、初期硬結ト潰瘍ヲ呈スルモノ一〇、初期硬結ト浮腫ヲ呈

スルモノ一〇、初期硬結ノミ二、

第貳期微毒 五十五名

(原著及實驗)

第十九卷 第七號

一九一

扁平「コンヂローム」一六、扁平「コンヂローム」ト微毒性禿頭四、扁平「コ
 ンヂローム」ト微毒性白斑二、扁平「コンヂローム」ト微毒性蕁麻疹一、
 扁平「コンヂローム」ト微毒性丘疹一、扁平「コンヂローム」ト口腔微毒性
 潰瘍一、微毒性蕁麻疹七、微毒性白斑一、微毒性蕁麻疹ト丘疹二、微毒
 性丘疹八、微毒性丘疹ト禿頭三、咽頭微毒性潰瘍五、咽頭微毒性潰瘍ト
 微毒性乾癬二、微毒性乾癬二、
 第參期微毒 二十八名

護膜腫ノ破懷シタルモノ 一八
 前額部一、眼瞼頰部一、頸部二、前膊一、鼠蹊部一、臀部二、大腿部
 一、下脚部二、足背部一、

護膜腫ノ破懷セザルモノ 一〇
 胸骨一、鎖骨一、前頭骨一、頸部二、大腿部二、下腿部三、

結 論

- 一、臺北ニ於ケル微毒患者ハ花柳病患者ノ半數以上ヲ占ム
- 二、内地人ハ臺灣人ニ比シテ約二倍強ニ當ル
- 三、男女ヲ比スルニ男二、五、女一ノ割合ナリ
- 四、年齢ハ二〇乃至三〇才ノ者ニ多ク一乃至五才ノモノニモ比較的多數ナ
 リ
- 五、本病ノ種類ハ第貳期微毒ガ最も多クシテ第壹期微毒是レニ次グ
- 六、職業ニテハ内地人ハ下級ノ勞働者ヨリモ上級ノ官吏ニ多ク臺灣人ハ農
 商及ビ勞働者ニ多シ
- 七、臺北ニ於テハ微毒患者ハ年々増加シツ、アリ

第百二號

五

八、人口トノ割合ハ明治四十一年以後ヨリ著シク増加シ近年ニテハ〇、六%強ニ相當ス

九、一般患者ニ比シテハ全シク明治四十一年以後ニ増加シ二、五%ニ相當ス

一〇、内地人ニテハ人口並ニ一般患者ニ對スル徵毒患者ノ%ハ其ノ差異少ナレバ臺灣人ニテハ甚シキ相違アリ

一一、内地人ハ徵毒症狀輕ク醫治ヲ受ケザルモノ少ナキニ反シ臺灣人ハ其ノ症狀強ク且ツ潛レタル患者甚ダ多數ナリ

〔附〕余輩ノ希望

世界各國何レニ於テモ文明ノ進歩ニ隨ヒ徵毒ハ益々其ノ蔓延ヲ呈シツ、アリ吾ガ臺北ニテモ年々増加シツ、アルハ事實ナリ

現今ノ趨勢ニテハ到底充分ナル豫防法ノ下ニ其ノ撲滅ヲ計ルハ困難ニシテ只各自ガ其ノ人格ヲ高メ危險ナル憎ムベキ此ノ疾病ニ罹ラザル様即チ其ノ源泉タル賣笑婦ニ近ラザルヨリ外ニ途ハナシ

國家ハ公衆衛生トシテ國民ノ健康ヲ擁護センガ爲メ公娼ノ檢査制度ヲ設ケラレアルモ是レノミニテハ其ノ目的ヲ達スル事ハ絶對ニ不可能ニシテ且ツ奏効ヲ認ムルハ難事タリ

各國ノ學者ハ此ノ豫防ニ就キ非常ナル腦力ヲ費シテ其ノ方法ヲ講シツ、アリ結果昨年八月ロンドンニ開カレタル萬國醫學大會ニ於テモ皮膚科徵毒科

法醫學科連合分科ハ左記ノ三條ノ決議ヲナシ各國政府ニ迫ラン事ヲ計リタリ即チ

一、徵毒ガ社會ヲ蹂躪シ健康ヲ損害スルノミナラズ益々播布ヲ逞フセン

トス、本會ニ列スル各國代表者ハ各政府ニ注意ヲ促ス事

二、徵毒ニ關スル通信機關ヲ各國政府衛生局ニ設致スル事

三、徵毒ノ診斷及ビ治療法ニ向フテ秩序的法则ヲ遵守セザレバコレガ豫防ヲ成就シ難キ事

吾國衛生當局者ニオカレテモ其ノ意ヲ了トセラレ比較的完全ニ近キ豫防法ヲ講セラレ年々増加シツ、アル此ノ危險ナル怖ルベキ徵毒ノ撲滅ヲ計ラレン事ヲ切ニ希望ス。

雜報

●第拾四回十全會講話部大會 (五月十六日)

社會の大勢我校の意氣吾人の理想は奈邊に在りや斯かる鼎の輕重を問ふは蓋し講話會を措きて他に求む可からず時是在に春芳漸く歇んで夏綠初めて齊しき五月十六日午前八時を期し本校大講堂に於て第十四回大會を開催す當日の概況一束左記の如し。

土肥部長

一、開會の辭

日常の抱負嶄新の研究は等しく會員の希望する所なり然れば且講じ且聽き以て新知を啓發し徳器を成就し日新の大勢に後れざらしめんには出演辯士諸君に俟つ所大なりと雖尙ほ一面會員諸氏の清聽を煩はさざる可からず即阿々相待ちて初て講話會の眞意是にあらん乞ふ自重自愛せよ。

二、囑に就て

中西與三郎君